シェイクスピアの〈目〉のイメージに関する研究(6)

鳴島　史之

(平成7年4月28日受理)

A Study on Shakespeare's Eye Imagery (6)

Fumiyuki NARUSHIMA

Abstract

This paper follows my previous one and continuously analyses Sidney's *Astrophil and Stella*. Here, I will focus my attention on the death imagery in Sidney's poetry, and I will consider the importance of that imagery in critically appreciating his poems. I think that Plato and his ideas had great importnce in the construction of Sidney's own ideas in making his poetry, especially those concerning death. It was Plato who defined that this life is just a shadow of another world which is called an ideal existence. In Sidney's poetry, I found that this idea of Plato's has a very fresh expression, and it could be said that Plato's ideas are a key which can solve many mysteries surrounding Sidney's poems.

第二章　他のソネット作家たち

第二節　サー・フィリップ・シドニーの *Astrophil and stella*

訂 正 と 追 補

その1　92年の Harvester New Critical Introductions to Shakespeare への一冊，その『夏の夜の夢』の解読の中で，James Calderwood もまたパノフスキーに言及するが，[1] 彼のようにネオ・プラトニズムにまで触れることが正しかったと思われる。blind Cupid はすなわち sensuality の象徴，clear-sighted Cupid は divine love を表すとするパノフスキーの理論を紹介することで，例えば，*Astrophil* の5番がよりよく理解される。

その2　Linda Woodbridge の新刊『サターンの鎌』[2] によって，我々は新たに evil eyes 信仰に関して目を開かれる。魔術に色づけされたその著書の中で彼女は，いくつか興味深い指摘を与えてくれる。曰く，「視線の理論によれば，物が見えるということは，目から放射された光線が，その落ちるところの物を照らすからである。」(p.24) また，「ターケインの目をくらませる光は，彼自身の凝視の反射である。」(p.61) そしてまた，「目それ自体は，危うくも貫通にさらされやすい穴である」(p.67)。最後の言説は，目の virginity を想定する文脈での類似性である。Woodbridge に関しては，以下 *Astrophil* の48番の読みの際に，再び言及する。

その3　Sidney の数霊学は John Dee に多くを負っていると見るべきだろう。一時期を師弟の

関係で過ごした二人の間柄をもう少し考慮すべきだ。筆者は最近になってやっと Frances Yates の著書の再評価をはじめ，Sidney 等について多くの言及を目にした。[3]

第二項「目」と「死」

2. 2. 2. *Asrophil* 全体にわたって，以下のことが観察される。die という単語は *Astrophil and Stella* の中に 4 回あらわれる。(32.2,43.8,48.8,94.10.) died は80.8に 1 回だけあらわれる。このうち，die はすべて同じソネット内に eye という語を持つ。died は“dide”で，「色を染める」意なので，現代語では dye のことで対象外としていいだろう。(102.5 dies も同様。) death の場合は 6 回，death's 1 回，deaths 2 回，death-wound 1 回，deadly 1 回。これを総合すると計13回のコンテクストがあることになる。そのうち 9 回の〈死〉の文脈は eye と同じソネット内にある。主に以上のような死の文脈を探って行き，併せて mortal, kill 等の語を含めた他の文脈も考慮の対象にする。

ここでの関心の中心は〈目〉と〈死〉との結びつきであるが，〈目〉は Cupid のイメージを媒介して〈死〉につながるとまずは考えられる。例えば，第 2 番のソネットで，“Not at first sight, nor with a dribbed shot / *Love* gave the wound, which while I breathe will bleed” (1-2)[4] とあり，さらに第 7 番で“To honor all their deaths, who for her bleed” (14)とある中の bleed という単語の共通性から導いて，Cupid のまたらす傷が死につながる致命的なものとして想定する事が可能だ。この第 7 番のソネットの冒頭には eyes という語があらわれる。このソネットは Stella の黒い瞳がいかに美しいかを歌ったもので，終わりのカプレットに至るまで死のイメージは出てこない。ここで〈瞳〉が〈死〉を連想させたというよりも，前節でのべたように，瞳の黒い色が喪服を想像させたと考えるのが，無理が無い読み方だろう。

ただ，必ずしも Cupid のイメージを伴わないでも，恋のために死ぬ思いを語る場合もあり，例えば第 6 番の“living deaths” (4)のような発想はその典型である。これは以下に詳説する

次に death という語が現れるのは20番で，ここでは Cupid 自身が殺人者としてとらえられてくる。Cupid は musket 銃でもかまえて ambush しているようにイメージされている。

> FLIE, fly,my friends, I have my death wound ; fly,
> See there that boy, that murthring boy I say,
> Who like a theefe, hid in darke bush doth ly,
> Till bloudie bullet get him wrongfull pray.
> (1-4)

OED によれば musket は arrow も bullet も発射させることができたようだから，Cupid が使っても悪くない武器であっただろう。因みにシェイクスピアも musket 銃から〈目〉を連想している。“…where thou / Wast shot at with fair eyes, to be the mark / Of smoky musket?” (*All's Well That Ends Well*, 3. 2. 108-110).[5] また，Dekker と Middleton の共作の *The Roaring Girl* においても，同様のイメージ群が観察される。

> …and now stands he (in a shop hard by) like a musket on a rest,
> to hit *Goshawke* i'the eie…
> (4. 2. 36-38)[6]

さて上の Sidney の一節には次のように続いている。

So Tyran he no fitter place could spie,
Nor so fair levell in so secret stay,
As that sweete blacke which vailes the heav'nly eye:
There himselfe with his shot he close doth lay.
(5-8)

ここに至ってやっと"eye"という語が現れて，〈目〉と〈死〉の連関が出てくるのだが，ただこの間を通じて fly-ly-spie-eye と韻は保持されているので，eye という音の登場はあながち唐突なわけではない。むしろの Stella のイメージがあらわれることは，待たれていたと言うこともできるだろう。

つまり，戦争あるいは殺人者の比喩でこの詩が始まったとき，その比喩としての殺人，すなわち恋の病の原因となる Stella の存在は，表面に出てこなくても詩の内側に隠れている。直接的には Stella の目が詩人を悩ませる元凶でこれ以前の詩の中で Stella という存在はその目の持つ特性が大いにクローズアップされてきて，イメージとして定着されたわけだから，〈目〉＝Stlla という図式が作者の中にも読者の中にも同様に定着される。すると今度は，fiy-ly-spie と引っ張ってきた音の類似が，eye すなわち Stella の存在を換気するように働くのではないか，ということである。これが筆者が待たされていたと説明する事情である。

8行目の shot は Cupid のイメージをあらわすのに充分と考えられ，以上説明したことと併せて，**2.2.1** で説明した eye と Cupid の関係への証左であることを指摘しておく。

さて次に，第25番の"mortall"(11)において，死のイメージはそれほど強くは現れないのだろうが，特に mortall が eyes と並んでいる場合は気になるものがある。

Vertue of late, with vertuous care to ster
Love of her selfe, takes *Stella's* shape, that she
To mortall eyes might sweetly shine in her.
(9-11)

この詩を読み解く鍵は，vertue という語と第5番のソネットにある。第5番や第21番のソネット中で，vertue という語が現れるときは，みなプラトンの文脈である。例えば，典型例は第5番の以下のようである。

True, that true Beautie Vertue is indeed,
Whereof this Beautie can be but a shade,
Which elements with mortall mixture breed…
(9-11)

すなわち，Beautie は mortall な人間に示される現実界の Stella の美，そして Vertue とはそれを超えたイデアとしての Stella の徳なのだろう。すると，Shakespeare のソネットの46番のように，目と心の取り分が分かれて，内的な心の取り分の方が優れていると，言いたいのではないだ

ろうか。

従って，mortal であることの特性とは，理想美よりも一段低いところの美に収まるということが含意されているようだ。これは42,97,99番と mortall の現れる文脈で再出する意義付けである。

例えば，42番で，"O eyes, where humble lookes most glorious prove"(5)とある，humble な物腰は，理想美を絶対とした対比の中にある故に，謙るわけで，同じく"Oppressing mortall sense, my death proceed, / Wrackes Triumphs be, which *Love* (high set) doth breed" (13-14)と，oxymoron のうちに詩が終結するのも，対比の図式にあるからである。(このあたりは後出の42番全文の引用を参照。)

97番でも，night と light の対比として定着するのは，実のところ理想美と現実美のプラトン的差異であり，内在する oxymoron は Astrophil 自身の比喩でもある。

DIAN that faine would cheare her friend the Night,
Shewes her oft at the full her fairest face,
Bringing with her those starry Nimphs, whose chace
From heavenly standing hits each mortall wight.
But ah poore Night, in love with *Phoebus'* light…
(1-5)

99番の光と影も結局プラトンに還元できるわけで，

WHEN far spent night perswades each mortall eye
To whom nor art nor nature graunteth light,
To lay his then marke wanting shafts of sight,
Clos'd with their quivers in sleep's armory ;
With windowes ope then most my mind doth lie,
Viewing the shape of darknesse and delight,
Takes in that sad hue, which with th'inward night
Of his mazde powers keepes perfit harmony…
(1-8)

しかし，この darknesse と delight の饗宴，この矛盾の harmony は遅かれ破綻する。なぜなら朝になると，やはりプラトン的分離が，心と感覚を引き裂くからだ。

In tombe of lids then buried are mine eyes,
Forst by their Lord, who is asham'd to find
Such light in sense, with such a darkned mind.
(12-14)

Shakespeare ならば，例えばここで tomb と womb の語呂を使って，(ソネット3番のように，)もう一段階詩想をひねったかもしれない。だが，Sidney は基本的に oxymoron の詩人ではあっても，wordplay の詩人ではなかった。Sidney は定着したイデアの矛盾の中に，自らを埋没させたの

だ。

ただひとつ，別の方面から筆者にとって関心があるのは，この99番の詩の葛藤が，下線を付したような韻の姿をとっていることである。明らかに矛盾する light と night の概念は音韻の中に何らかの共通項を見出し，さらには sight や delight と融合する。この溶鉱炉の中に'eye や lie の韻も投げ込まれ，詩はひとつの芸術と化す。

32番では Morpheus が登場する。これは言うまでもなく眠りの神，あるいは夢の神である。眠りはマクベスの言うように，"The death of each day's life" (2. 2. 36)であり，死との共通性は深い。しかし奇妙なことに，この Morpheus の特性の一部は lively または witness of life と表現されている。

MORPHEUS, the lively sonne of deadly sleepe,
Witness of life to them that living die…
(1-2)

lively と deadly は明らかに矛盾し，それは2行目の living die で定着するのだが，これについて Ringler は次のようにコメントを加えている。

> Morpheus, the son of Somnus, has the special function of bringing dreams that apper in human shape (Ovid, *Met*. xi. 635) ; therefore 'lively' and 'deadly' mean 'life-like' and 'death-like'.[7]

Morpheus の魔力はそれ自体が矛盾するわけで，つまり，眠りの神として，人間を〈死〉に近い睡眠に誘う一方で，夢の神として，人にあたかも現実のごとく〈生〉を出現させる。living die とは6番の"living deaths" (4)と同工で，恋人の死なんばかりの苦悩の状態を指すが，この状態がそもそも Morpheus の魔力にかかった状態に似通っているため，彼は召喚されたのだろう。

しかし彼の魔力を効を奏しない。なぜなら，そもそも Astrophil は眠りにつけないからだ。その意味では Astrophil の〈夢〉は実際には夢ではなく，現実の延長，夢うつつであっても完全に眠りにつけない marginal な状態と言うことができる。

Since thou [Morpheus] in me so sure a power keepe,
That never I with clo'sd-up sense do lie,
But by thy worke my *Stella* I descrie,
Teaching blind eyes both how to smile and weepe…
(5-8)

そしてこの状態の原因となっているのが，Stella の存在であることは，皆の認める事である。このように死あるいは眠りの，(あるいは死の不在，眠りの不在の，) 原因として Stella が描かれている事は，非常に意味があると筆者には思われる。

Stella の存在は死なんばかりの苦悩を与えるが，完全に殺し去ってはしまわない。むしろ生殺しながら生かしておく。この予期せぬ残虐さが比喩として一つの表現となって示されるのが，下線部 blind eyes であろうか。つまり，〈目〉本来の機能を失った目，盲目の目は，目として存在理

由を持たないにも関わらず，目として存在し続ける。それは笑い，同時に泣くという（物を見るという本来の機能とは別の働きの）矛盾の中にその唯一の存在理由を示し，永遠に機能を回復しないまま，見えない幻影を追って生き続ける。幻影は現実であり，また現実ではないのだ。生は生であり，生ではないのだ。Stella は Stella であり，Stella ではないのだ。この状態はそのまま Astrophil のメタファーとなっている。

42番は次のようである。

O EYES, which do the Spheares of beautie move,
Whose beames be joyes, whose joyes all vertues be,
Who while they make *Love* conquer, *Love*,
The schooles where *Venus* hath learn'd Chastitie.
O eyes, where humble lookes most glorious prove,
Only lov'd Tyrants, just in cruelty,
Do not, ô do not from poore me remove,
Keepe still my Zenith, ever shine on me.
For though I never see them, but straight wayes
My life forgets to nourish languisht sprites;
Yet still on me, o eyes, dart downe your rayes:
And if from Majestie of sacred lights,
Oppressing mortall sense, my death proceed,
Wrackes Triumphs be, which *Love* (high set) doth breed.

前の項で述べたように，"dart"には直接的に矢の意味はないのだが，Cupid が仕掛けた死であるならば，当然武器は弓矢であろう。このように Cupid と Stella はあまりに一体化しているため，Cupid の矢という比喩が詩を生み出す方向に働く。あるいは比喩が一人歩きを始め，定義される前に動き出す。

ある意味ではこの"dart"は pun なのだろうが，そういう事実よりも，この pun が詩を生成していく仕方に筆者は関心がある。つまり，天体のイメージを想定して書き始められた時点では，発想の中に Cupid の矢のイメージはなかっただろう。それが dart という語をきっかけにして，Cupid が大きくクローズアップされる形で詩が終了する。この作品の生成過程に pun の重要性を認めたいのである。

pun は，われわれが作品を批評する際に，作品全体を眺めて，細部がどういう構造を持っているかを説明する言葉にすぎない。pun の働きが重要なのは，作者が作品を書きつつある最中である。何がきっかけで作品がある形に定着するかは，おそらく作者本人でさえもわからないのであろうが，pun を pun であると説明するだけでは何も生まれない。ここでは"dart"に関する pun が，12行目以降が書かれていない時点で，なんらかの作用を執筆中の作者に与えた可能性を考えたいのである。[8]

43番では死はやはり Cupid の武器が原因である。(あるいは Cupid の敵対者の武器といった方は正解か，いずれにしても，対 Cupid の戦いの図式の中で。)

For when he will see who dare him gainesay,
Then with those eyes he lookes, lo by and by
Each soule doth at *Lone's* feet his weapons lay,
Glad if for her he give them leave to die.
(5-8)

48番後半は以下のようである。

Let not mine eyes be hel-driv'n from that light:
O looke, ô shone, ô let me die and see.
For though I oft my self of them bemone,
That through my heart their beamie darts be gone,
Whose curelesse wounds even now most freshly bleed:
Yet since my dreath-wound is already got,
Dear Killer, spare not thy sweet cruell shot:
A kind of grace it is to slay with speed.
(7-14)

ここで問題にしたいのは，死と性的な ecstasy との対比である。Cleopatra を持ち出すまでもなく(4.15.39)，当時の慣習として，性と死を比べ，両者の成就を連想させてみることが行われた。この文脈でも，目が死と並置される場合に，性的なニュアンスを読みとることが可能ではないか，ということである。ここで注目すべきは，前掲の Woodbridge の書中にある，目の virginity に関する言及である。たとえ，貫通される側がこの場合男性であるという違いはあっても，Stella の属性として持っている light あるいは，darts が，phallic symbol として働いてることは，否めないのではないだろいか。

50番では，Morpheus の詩のときと同じように，死は生の中に内在すると語られる。"While those poore babes their death in birth do find" (11). ここで those poore babes が意味するのは，Sidney (Astrophil)自身の詩(these lines (12))であり，非力な詩人ゆえ死産してしまうと，自戒して言う台詞である。自らの詩に危うい存在しか定義できないことが問題であり，考慮に値すると思われる。

68番後半はこうである。

And all in vain, for while thy breath most sweet,
With choisest words, thy words with reasons rare,
Thy reasons firmly set on *Vertue's* feet,
Labour to kill in me this killing care:
O thinke I then, what paradise of joy
It is, so faire a Vertue to enjoy.
(9-14)

ここに見られる48番との用語の一致は何を意味するのだろうか。48番の引用には加えなかった

が，その2行目ではVertueが扱われていた。68番の1行目でも，"*STELLA*, the onely Planet of my light"と，lightが出てくる。

この場合のヒントはやはりPlanetだろうが，恒星と惑星の区別など存在しなかったであろう当時の天文学でいえば，これは太陽だろう。太陽と言うと，筆者が以前に論文で分析したように，PetrarchのソネットでLauraが太陽に例えられて以来，Sonnet Sequencesの中で主流を占めていく比喩のあり方である。このことは筆者の次の論文で扱う予定である。

この部分，48番との関連でいくと，さらにVertueという語から，5番との関連で言うと，Astrophilが死んで捨て去ろうとするのは，この世の現世的な愛欲で，それを超えたイデアは太陽として表わされる。Astrophilが祈願したのは，現世を離れた徳なのだが，それは実現したかどうかは不明である。

PetrachのLauraのときのように，われわれはここでLady Penelope Richを持ってきても無駄であろう。まして，モデルとなる女性の生き死にを取り沙汰しても甲斐なしということだろう。ただPetrarchのときと違い，(Petrarchの実在のモデルをあまり大きく扱うことの危険性は否めないが，) 現実のモデルを想定しなくても，プラトンの枠組みで十分に*Astrophil*を理解することは可能である。要は，プラトン的と呼ぼうが，宗教的と呼ぼうが，現世以外の価値基準を持ち出して，云々することで，その欲望にAstrophilが打ち勝つという問題が，詩集を進めていく推進力であるというだけの話である。

77番で死はソクラテスのそれを手本にする。"Those lips, which make death's pay a meane price for a kisse" (6).あるいはそれはMacbethのものかもしれない。"This even-handed justice / Commends th'ingredience of our poisoned chalice / To our lips" (1. 7. 10-12).罪が不当のものであうろうが，正当なものであろいが，いずれにしても，毒杯をあおぐ姿は愛の悦楽とはほど遠いものである。こういう形でしか愛がかたられないことが，*Astrophil*という詩集の性格をなにがしか反映していると思われる。それにしても毒杯に比されるStellaのことであるが，それでもなお沈黙を保っていることは，例えば，ShakespeareのDark Ladyの饒舌とは一線を画する感がある。この詩中にeyesは存在しないが，1行目に"Those looks, whose beams be joy"とあるあたりは，目のイメージが存在するのと同様の効果があるとは考えられる。

78番のeyesはArgusの百の目であり，ここでもVertue(6)は再出する。

79番からkissの三作で，(77番から始まっていると考えてもいいが，) まず79番で死は，oxymoron的に中庸の位置に置かれる。

Teaching the meane, at once to take and give
The friendly fray, where blowes both wound and heale,
The prettie death, while each in other live.
(9-11)

ここまで読むと，先ほど読んだ77番に読み直しの機会が与えられるわけで，(筆者よりも賢明に読者には，もっと早期に与えられたのだろうが，) つまり，77番でmeane priceとあったものが，(何とはなしに具体的でなかったものが，) 中庸の概念でより明確化すると思われる。つまり，77番において，死を賭してまで触れたStellaの唇の至福は，死をもう一方の秤に入れてもまだなお釣り合うほどの価値を持っていると，読めないだろうか。32番のMorpheusの詩で釣り合っていたlifeとdeathの均衡がここにも再出している。

82番の詩はNarcissusの死である。

Nymph of the gard'n, where all beauties be:
Beauties which do in excellencie passe
His who till death lookt in a watrie glasse…
(1-3)

詩編を貫く死が，どうしてこうまですべて美しい人の死であるのだろう。すべて死に行くものは，(Astrophilであっても，他の比喩の中の存在であっても，)死よりもなお貴重な美に対して忠実に死に行くのである。甘美な死を想定していいが，死が美しいかの問題よりも，今はむしろその代償に得られる物である。金のリンゴはこの場合あまりにも性的なニュアンスが強すぎないだろうか。

Sweet gard'n Nymph, which keepes the Cherrie tree,
Whose fruit doth farre th'*Esperian* tast surpasse:
Most sweet-faire, most faire-sweet, do not alas,
From comming neare those Cherries banish me…
(5-8)

イヴが味わったのは確実に性的な果実であっただろう。fairとは目で愛でるもの，sweetとは(性的に)味わうもの。Astrophilの中にプラトン的葛藤は再現される。そして彼は性的欲望に打ち勝とうとするのだが。"I will but kisse, I never more will bite" (14).

第3歌でもlightとnightの葛藤は再現される。"As his light was her eyes, her death his endlesse night" (10).

Petrachほどの転換ではないにしても，86番の中断以降，*Astrophil*は第二部に入る。[9] 第二部の特徴的なことといえば，性的なニュアンスがなくなったことだろう。kiss sonnetsにあったような，直接あからさま欲望の流出は止まり，代わりに後悔の暗い夜か，希求される太陽のイメージに姿を変える。これについてはまた別の機会に語る時が来るだろうが，今は死の姿を最後まで辿ることにする。

94番の詩想は非常に難解ながら，今まで辿って来た方向で考えれば，十分理解できる。

GRIEFE find the words, for thou hast made my braine
So darke with misty vapors, which arise
From out thy heavy mould, that inbent eyes
Can scarce discerne the shape of mine owne paine.
Do thou then (for thou canst) do thou complaine,
For my poore soule, which now that sicknesse tries,
Which even to sence, sence of it selfe denies,
Though harbengers of death lodge there his traine.
(1-8)

misty vapors とは，形而下の人間にはとらえにくい形而上的イデアの呼びかけであり，はからずも Stella の現世的 heavy mould（肉体）から立ち昇っているのだが，内向した Astrophil にはその正体が理解できない。しかし彼はその呼びかけが彼の精神的部分(soule)に対してであることは知る。感覚的には理解されながら，定義付けを拒否するその呼びかけは，結局は死の方角にしか導かないと，（否定的な死ではないが，）Astrophil は認めるのである。

105番の dead glass(3)には，Ringler が"eye"という注を付けている。[10] さらに，G. C. Moore Smith の説を採用して，身体的な目と対比して，精神的な視点を読みとっている。的を得た解釈と考えられる。

oxymoron は106番のソネットに再出する。"O ABSENT presence *Stella* is not here" (1).形而上，形而下両者を兼ね合わせた存在である Stella はこの形にしか定義できないのかもしれない。これは32番の Morpheus の詩で述べたことの，再確認である。

以上，*Astrophil* における死のイメージの分析を試みた。

（以下続稿）

注

1) James L. Calderwood, *A Midsummer Night's Dream* (Hemel Hempstead : Harvester Wheatsheaf, 1992), p.25
2) Linda Woodbridge, *The Scythe of Saturn* (Urbana : University of Illinois Press, 1994).
3) Frances A. Yates, *The Occult Philosophy* (London : ARK, 1983), pp. 80ff.
4) Sidney からの引用として利用するのは，Oxford 版である。William A. Ringler, Jr. (ed.), *Poems of Sir Philip Sidney* (Oxford : Clarendon Press, 1962).なお，Sidney 以外も含めて，すべての引用のイタリック部分に関しては，原文のまま引用したが，下線については，筆者が強調したい部分を示したものである。
5) Shakespeare からの引用は，Oxford 版全集 Stanley Wells and Gary Taylor (eds.), *William Shakespeare : The Complete Works* (Oxford : Clarendon Press, 1986)からである。
6) この部分の引用は，Fredson Bowers (ed.), *The Dramatic Works of Thomas Dekker* (Cambridge, 1953-61) に拠る。
7) Ringler, p.472.
8) pun が発想のきっかけになる可能性については，拙稿「シェイクスピアの地口的発想」(『LEO』第11号 1982, pp.97-102) 参照。
9) *Astrophil* が86番と続く数編の歌によって中断されることに関しては，拙稿「シェイクスピアの〈目〉のイメージに関する研究(5)」(『北見工業大学研究報告』第26巻第2号 1995, pp.101-14) 参照。
10) Ringler, p.490.